

道徳・倫理の再建と統一思想

統一思想研究院 大谷明史

1 序

19世紀に、西洋社会において、神を否定する強力な無神論、唯物論思想が生まれ、あっという間に、茨のように全世界を覆っていった。1859年はその象徴的な年であった。すなわちカール・マルクスが『経済学批判』を著し、唯物弁証法に基づいて唯物史観の公式を提示すると同時に、後に『資本論』として体系化されるマルクス主義経済学の骨子を発表したのである。その同じ年に、チャールズ・ダーウィンが『種の起源』を著し、現在ある生物は神の創造によるものではなく、弱肉強食の生存競争を通じて進化したものであると主張した。

そして彼らから少し遅れて19世紀末にジークムント・フロイトが登場した。フロイトは、人間の心を根底から揺り動かしているものは、リビドーという性のエネルギーであるといい、人間の霊性を否定する本能的な人間観を提示した。それは生理学的唯物論というべきものであった。

中世から18世紀に至るまで、西洋社会において、キリスト教は絶対的な指導的精神であり、人々は無条件に神とキリストを信じ、教会の教えを柔順に受け入れていた。14世紀から16世紀に台頭したルネサンスは、中世の束縛から人間精神を解放しようという運動であったが、人々の神への信仰は揺るぎないままであった。18世紀の啓蒙思想において、無神論と唯物論が展開されたが、それはキリスト教精神を揺るがすまでには至らなかった。しかし、19世紀の無神論・唯物論はキリスト教精神を根底から揺るがすものであり、西洋社会のみならず、全世界を覆いつくす勢いで広がっていったのである。

カール・マルクスによって築かれた暴力革命の共産主義思想は、20世紀に至り、レーニンの指導するボルシェビキ革命として実を結び、地上に始めての共産主義国家ソ連が誕生した。ソ連は宗教の根絶を公然と宣言する悪の帝国であった。そして歴史上、最大の独裁者であるスターリンのもとで、ソ連帝国は世界共産化を目指し、全世界を震撼とさせていった。そして第二次世界大戦の終了とともに、共産主義は東ヨーロッパとアジアに広がり、まさに世界を飲みつくそうとする勢いになった。

かくして20世紀を通じて、世界赤化を目指す共産主義諸国と、共産主義の攻勢を防ぎながら、神の下での理想世界を目指す民主主義諸国との間に、熾烈な冷戦が展開されたのであった。しかし、20世紀末に至り、共産主義世界の中枢であった悪の帝国ソ連は崩壊した。

今日、共産主義の輝きは色あせたが、共産主義思想のよきパートナーであった進化論は相変わらず世界中で科学的真理として受け入れられている。そして進化論は神を否定する唯物思想の温床となっており、今なお生き続けている共産主義思想を支えているのである。

さらに、フロイトに端を発した思想が、やがて性解放理論となって、マルクス主義、ダーウィニズムと共に、今日の世界的な倫理、道徳の崩壊現象に大きく寄与しているのである。

2 性解放理論の展開

フロイトはダーウィンの影響を強く受けていた。ダーウィンによれば、人間は人間以外の生物と異なる特別に高貴な存在ではなく、猿から進化したものであった。同様に、フロイトは、人間は動物と根本的に異なる霊的な存在ではなく、性的な本能に操られた動物的な存在であると主張したのである。

そのようなフロイトの主張に基いて、ライヒ、マルクーゼに代表されるフロイト左派の性解放理論が生まれた。やがて性解放理論に裏づけられたフリーセックスの性革命が、1970年代のアメリカを中心として、世界に広がっていった。そしてエイズが蔓延する世界となったのである。今、そのような危機的状況を迎えて、人々はようやく性解放の誤りに目覚めようとしている。しかし従来 of 宗教や倫理によっては、性解放思想を根本的に克服することはできないのであり、性解放の風潮は依然として世界を覆っているのである。

愛と性は、道徳や倫理によって規制されるようなものではないというのが、性解放理論の主張である。つまり道徳や倫理には確固たる根拠はなく、無意味なものであって、廃棄せよというのである。性解放理論は直接的にはフロイト左派によるものであるが、その理論の母体となったのはいうまでもなく、19世紀のマルクス主義、ダーウィン主義、フロイト主義の無神論であり、唯物思想であった。さらにこれらの19世紀の無神論・唯物論の原型となったのが18世紀の啓蒙思想であった。言い換えれば、18世紀の啓蒙思想は19世紀の無神論・唯物論の到来を準備したのであった。その中心的人物がジャン・ジャック・ルソーであった。次にフロイト左派の性解放理論の母体となった思想的背景を見てみよう。

(1) ルソーの啓蒙思想

ルソーが理想として掲げたのは人間の自由であった。彼は「自然の状態においては、人間は自由であり、生を楽しむことができるが、社会においては、人間は自由を失い、不幸である」と考えた。そしてルソーは野生動物のような未開の自然人を理想とし、社会の中にある人間は悪に染まっていると見て、現在の政治や社会制度を破壊することによって人間を解放しようとしたのである。

人間は本来、動物的な存在であるとするルソーの人間観は、マルクス主義の「衣食住を求めて労働したサル」、ダーウィン主義の「最も生存に適していたサル」、フロイト主義の

「性的衝動に操られた動物」という動物的人間観へと展開していったのである。

ルソーは『人間不平等起源論』の中で次のように論じている。未開の自然状態において、不平等はほとんどなく、平和で幸福であった。ところが人間の精神の啓発にともない産業が改良され、それが家をつくることを可能にし、そこに家族が生まれた。そして家族を基盤として私有財産が発生し、私有から対立が生じ、不平等の社会が成立したのである。このようなルソーの見解は原始共同社会では、人間は互いに協力し合い、すべてを共有していたが、生産力の発展とともに、家庭が成立し、家父長制の社会が成立し、支配する者と支配される者、搾取する者と搾取される者の対立が生じたとするマルクス主義の原型となったのである。

ルソーは『学問芸術論』において、「ルネサンス以来の学問や文学や芸術の復興が人間から本来の自由の感じをうばいとり、奴隷状態を愛するようになっている」と論じた。そして、礼儀作法は文明社会において、人間の本質を見失わせ、人間を疎外させるものであるといい、原始的な自然状態にこそ道德の基礎があると見たのであった。

(2) マルクス主義

マルクスは、原始状態の社会は自由で平等であり、すべてが共存であり、互いに助け合う社会であり、そこには人が人を支配するとか、人が人から搾取するというようなことはなかったと見た。エンゲルスは『家族、私有財産および国家の起源』において、アメリカの進歩的な人類学者モルガンの説を引用しながら(マルクスもモルガンの研究を高く評価していた)、次のように述べている。

原始の状態において男女の関係は全く規律のない自由なものであった。すなわち多妻制、多夫性の社会であって、「あらゆる女があらゆる男に、またあらゆる男があらゆる女に、一様に属していた」⁽¹⁾のである。つまり部族内での男女の性関係は、何の制限もない「無規律性交」の状態であった。そのように「禁制の障壁がかってはおこなわれていなかった」⁽²⁾のである。それは正にフリーセックスにほかならなかった。それでは、そのようなフリーセックスの原始状態から、いかにして一夫一婦制の家族制度が成立したのであろうか。

エンゲルスによれば、集団婚の原始共産主義社会は母権制であった。それは無規律性交の社会では、子供の父が誰であるか、確かでないが、その母が誰であるかは確かだからであった。そのような母権制のもとでは、子は父の氏族に属していないため、父は財産を子に相続させることができなかった。ところが富が家族の私有となり、増大するにつれて、富の生産に直接従事する男が、家族内で女よりも重要な位置を占めるようになった。その結果、母権が覆されることになった。母権の転覆とともに、無規律性交の社会は崩壊し、一夫一婦制の家族制度が現れることになった。それは自分の財産を、確かな自分の子供に相続させるという、経済的な条件から生まれたものであり、「男の支配のうえにきずかれた」⁽³⁾ものであったという。

それでは階級社会において成立した一夫一婦制の結婚は、共産主義社会においてはどうかなるのであろうか。それにたいしてエンゲルスは、「[一夫一婦制は] 消滅するどころか、かえってはじめて完全に実現されるであろう」⁽⁴⁾といい、共産主義社会では、「相互の愛着以外には、まさにどんな動機も残らない」⁽⁵⁾ような婚姻、つまり愛のみに基づいた結婚となるという。しかし、それは何の裏づけもない空約束にすぎない。

実際、マルクスとエンゲルスは『共産党宣言』において、次のように語っている。

何にしても、共産主義者のいわゆる公認の婦人共有におどろきさわぐわがブルジョアの道徳家振りほど笑うべきものはまたとない。共産主義者は、婦人の共有をあらたにとり入れる必要はない。それはほとんどつねに存在してきたのだ。わがブルジョアは、かれらのプロレタリアの妻や娘を自由にするだけでは満足しない。公娼については論外としても、かれらは、自分たちの妻をたがいに誘惑して、それを何よりの喜びとしている。ブルジョアの結婚は、実際には妻の共有である。共産主義者に非難を加えたければ、せいぜいで、共産主義者は偽善的に内密にした婦人の共有の代りに、公認の、公然たる婦人の共有をとり入れようとする、とでもいったらよかろう。いずれにせよ、現在の生産諸関係の廃止とともに、この関係から生ずる婦人の共有もまた、すなわち公認および非公認の売淫もまた消滅することは自明である(下線は引用者)⁽⁶⁾。

これはブルジョア的な関係から生じる「婦人の共有」と「公私の売淫」は消滅し、共産主義的な公然たる「婦人の共有」になるということ、すなわち一夫一婦制の廃止とフリーセックスを公然と宣言するような発言である。

原始共産主義社会はフリーセックス社会であったという立場、そして一夫一婦制が経済的な支配のために成立したという立場から、真なる愛を中心とした一夫一婦制が成立するはずはないのである。また唯物弁証法の「否定の否定の法則」から見れば、最初の段階である原始共産主義社会が否定されて、第二の段階である階級社会になり、それがさらに否定されて第三の段階である共産主義社会になるが、その時、第三の段階は、高次元的に最初の段階に復帰するようになるのである。したがって、共産主義社会は高次元的な、文明の発達したフリーセックス社会になるはずである。

(3) ダーウィニズム

ダーウィンはクジャクの雄の美しい尾羽がいかなる自然選択によって生じたのか説明ができなくて心を悩ませた。そこで彼は性選択(雌雄選択)という概念をもち出した。すなわち、より美しい尾羽をもっている雄は雌に選ばれて繁殖行為に及ぶことができたが、みすばらしい尾羽をもっている雄は、雌に無視されて繁殖行為にあずかれずに淘汰されていったのだという。そして、そのような性選択の結果、次第に雄の美しい尾羽が進化したのだとい

う。

性選択は、雌は強くて美しい雄を選ぶということであり、雄同士は雌を奪い合って闘うということである。そのような性選択をよく表現している例が、ゾウアザラシのハーレムであり、女王バチと交尾する選ばれた一匹の雄バチ(他の多くの雄バチは殺されてしまう)などである。そのようなダーウィンのいう性選択の世界からは、人間社会における一夫一婦制を中心とした倫理というものは決して生まれるはずがない。生存競争を通じてサルが人間になったという進化論から見れば、人間社会においても、競争的、闘争的なフリーセックス社会にならざるをえないのである。

(4) フロイト主義

19世紀において性を罪悪視するキリスト教道徳が、絶対的な権威をもってヨーロッパの人々の心を支配していた。当時、ヒステリーと呼ばれた不思議な症状があった。ヒステリーとは、身体にはどこにも異常がないのに、記憶喪失、幻覚、耳が聞こえない、口がきけない、立てない、歩けない、感覚がなくなるなどの症状を示す病的状態であった。そのようなヒステリーの患者に対して、催眠術を用いてその原因を探る試みがなされていた。その結果、それらは一様に、結婚生活における性的なフラストレーションや、過去の幼児期におけるいまわしい性的な体験に関係していることが明らかになってきた。しかし性を悪しきもの、恥ずべきもの、恐ろしいものとするキリスト教的な性道徳のもとで、医学界では誰もその見解を公表しなかった。そのタブーに挑んだのがフロイトであった。

フロイトは催眠術のほかに、自由連想法、夢判断によって、患者の心の奥底にあるものを引き出していく精神分析の方法を探究していった。自由連想法とは、患者の意識に浮かぶ事柄を自由に発言させながら、心の奥底にあるものを見い出そうとする方法であり、夢判断とは、夢の中味を述べさせることによって、心の奥底にあるものを発見しようとする方法であった。

人間を根底から動かしているのは性的な衝動であるが、幼児期の性的虐待や結婚生活における性的フラストレーションなどによって、心の奥深くに傷が生じている。しかし性を罪悪視するキリスト教道徳のもとで、患者はその心の傷を忘れようとして、その記憶を意識の外に追い出してしまふ。それがフロイトのいう「抑圧」であった。そしてこのような抑圧された心の傷が表面化することによって神経症などの症状が生じていると結論したのであった。当時のキリスト教は、性を悪なるものであると断罪していた。患者たちはそのような封建的道徳の被害者であるとフロイトは考えた。そしてそのような封建的道徳に対してフロイトは反旗を翻したのであった。

フロイトは精神分析によって、患者が無意識の中で恐れていた抑圧された記憶に立ち向かうようになれば、神経症は治ると考えていた。ところがフロイトの弟子たちの中から、それでは不十分であり、あらゆる抑圧を取り除いて、性のエネルギーを解放することによ

って神経症は治ると主張するフロイト左派が生じた。フロイトはそのような弟子たちの主張に不安を憶え、やがて彼らと袂を分かつようになった。

人間の心を根底から揺り動かしているのはリビドー（性的エネルギー）であるというのが、フロイトの根本的な立場であった。しかし後に彼は人間の心にはリビドーの宿るイド（「エス」ともいう）という動物的、本能的な部分だけでなく、イドのエネルギーをコントロールするエゴ（自我）があり、さらにエゴの核心として超エゴ（超自我）があると主張するようになった。イドは盲目的な、動物的要求が宿っている所であり、人間精神の原始的な場所であり、暗いジャングルである。それにたいして、エゴはジャングルの片隅にある文明化された所、ジャングルの中の開拓地である。エゴによるイドのコントロールの方法としてフロイトが考えたのが、イドの本能的衝動を抑えつけて意識の外へ追い出してしまう「抑圧」とか、「本能的欲求が、政治、芸術、音楽などの直接的満足以外の目的に向け換えられる過程」としての「昇華」などであった。すなわち、イドの衝動が表面化して外に出ないように、あるいは前面に出ないようにすることであった。これはまさに「クサイものにフタ」をすることである。

性的な衝動の宿るイドを解放することは、野生の動物的存在になるということである。野生の動物は勝手に異性と関係をもち、性のために闘い、殺しあったりする。フロイトは人間がそのような野蛮な状態になることを恐れた。そしてフロイトは性の衝動の宿るイドに対抗するエゴ(自我)の存在を持ち出して、人間は自らエゴによってイドをコントロールすべきであると主張するようになったのである。キリスト教の封建的道德による抑圧に反旗を翻したフロイトであったが、結局、人間は一人一人、自ら性をコントロールすべきであると主張したのである。すなわちフロイトは、キリスト教の封建的道德から人々を解放し、人間が主体的に性をコントロールする民主主義的な道德を主張したのであった。言いかえれば、彼は外的な強制的な抑圧に反対し、内的な自律的な抑圧を説いたのである。

フロイトにおいて、エゴの役割はジャングルの猛獣が互いに争わないように「檻に閉じこめること」または「柵で仕切ること」である。すなわちエゴによってイドを抑えることによって、猛獣のような人間が文明的な人間になるというのである。フロイトはイドという衝動の塊りから、エゴが発達してくると考えていた。しかし、いかにして動物的なイドからエゴが発達するのか、不明である。フロイトは人間の霊性を認めていないので、彼のいうエゴは根拠のないものであった。

フロイトのいう文明社会とは猛獣たちを檻に入れた平和な動物園のようなものである。しかし猛獣は檻から放てば元の猛獣に帰るのみである。結局、フロイトの見た人間は本質的に野獸的な性的動物なのである。フロイトの「人間[男]はすべての女性を征服しようとする果てしのない願望によって操られるもの⁽⁷⁾」という言葉がそのことをよく表している。

(5) フロイト左派

精神分析によって性的な抑圧を明かにするだけでは何の解決にもならないというのがライヒやマルクーゼなどのフロイト左派の主張であった。彼らは性の抑圧そのものを取り除かなければならないと主張した。すなわち、動物的存在である人間を檻の中に閉じこめるから、人間は病気になるのであって、檻を取り去って野生のままにまかせよ、そうすれば、人間は本来の姿になるというのである。人間を根底から動かしているのは性的エネルギーであり、それが抑圧されることによって神経症が生じるというフロイトの当初の出発点から見ればフロイト左派の結論は当然のなりゆきであった。

フロイトのリビドー理論を受け継いで、それを性欲理論として極めたのがライヒ(W.Reich, 1897-1957)であった。ライヒは、性的な抑圧を取り去り、性的な満足(オルガスム、orgasm)を得ることによって神経症は治ると考えた。彼はマスターベーションを指導することによって、患者を治療しようとした。やがてライヒは「オルガスムの神」と化していった⁽⁸⁾。

フロイトは、弟子ライヒのこのようなオルガスム理論に不安を覚え、ライヒに背を向けるようになった。しかし人間は本来、性的衝動に操られた動物的存在だと主張したのは当のフロイトであり、ライヒはフロイトの本来の主張に忠実に従ったまでだった。

マルクーゼ(H.Marcuse, 1898-1979)も、ライヒと同様に、抑圧を取り除いてエロスを解放しようとした。フロイトによれば、エロスとは生の欲動であるが、その本質は性的欲動すなわち性欲であった(欲動 Trieb とは、人間の中にある動物の本能 Instinkt に相当するものをいう)。そしてエロスを揺り動かす原動力がリビドーであった。マルクーゼは、エロスの開花した抑圧的でない文明を「エロスの文明」と呼び、その実現を目指した。そしてそのような文明を実現するためには、「原罪はふたたびおかさねばならない」⁽⁹⁾、「もう一度知恵の木の実を食べなくてはならない」⁽¹⁰⁾と言った。エデンの園でアダムとエバに与えられた「食べてはならない」という神の戒めを破れ、というのである。このようなフロイトを元祖とするフロイト左派の性解放理論と今日の唯物論的思潮のもとで、フリーセックス時代がもたらされたのである。

3 規範の意義とその根拠

人間が家庭や社会において守るべき規範というものが道徳であり、倫理である。その規範の根拠は何であろうか。特に性の規範を中心に考察してみることにする。

(1) マルクス主義

先に見たように、マルクス主義では一夫一婦制の家族制度は経済的な条件から生まれたものであり、「男の支配のうえにきずかれた」ものであった。すなわちマルクス主義におい

て、倫理や道徳というものは、家長を中心とした経済的な支配体制を支えるためにつくられたものである。封建社会においては領主が農民を支配するために、君主社会においては君主が国民を支配するために、資本主義社会においては資本家が労働者を支配するために、つくられた制度であるという。つまりマルクス主義における規範とは、「支配のため」のものであった。そしてマルクス主義において、階級のない原始共産主義社会が無規律の性交社会であったように、階級のない共産主義社会も無規律のフリーセックス社会にならざるをえないのである。

(2) ダーウィニズム

ダーウィンは「人間と下等な動物の違いのなかでも、もっとも重要なのは倫理感あるいは良心である」と言い、良心について、「これは短いが決定的な言葉、“ねばならぬ”でいい尽くされている」と定義した。“ねばならぬ”とは「規範」または「戒め」であり、人間社会において、道徳や倫理と呼ばれるものである。ところが彼は、道徳や倫理がいかんにして成立したのか説明できないまま、ただ進化によって生じたと主張するだけだった。それにたいしてダーウィンの進化論を強力に擁護して「ダーウィンのブルドック」と呼ばれたハクスリー (Thomas Henry Huxley) は、道徳や倫理は進化によって説明されるものではないということを認めた。そして彼は、道徳や倫理は進化とは別の原理によって説明されなくてはならないと言ったが、その起源を明らかにすることはできなかった。

イギリスの発生生物学者であるウォディントン (C.H. Waddington, 1905-1975) は、「人間以外の動物世界では、進化のプロセス自体になんら倫理的資質があると思えない。……人間だけがひとり倫理化する存在であり、倫理を求めるのだ⁽¹¹⁾」と言いながら、生物進化の立場から人間がいかんにして動物的存在から倫理的存在になったかを論じた。そして彼は、人間社会における権威システムの発達が倫理体系の樹立を導いたといい、進化の目指すところは豊かな生であるといった。しかしそれでは動物には倫理はなく、人間だけが倫理的な存在となったという説明にはならない。動物世界にも権威システムはあり、動物たちも豊かな生を求めているからである。結局、生物的進化から人間の倫理性を説明することはできなかったのである。

1980年代に至り、倫理を進化論の立場から語ろうとする「進化倫理学」が再び論じられるようになった。しかし、実際に人間の倫理を生物的進化から明確に説明できていない。ダーウィニズムでは決して道徳や倫理を保証することはできないのである。

(3) フロイト主義

フロイトは道徳や倫理の起源に関して、次のような「原父殺害」の仮説を立てた。原始の遊牧民において、父親 (原父) は絶対的な権力をもち、女たちを独占し、息子たちを排

除し、従属させていた。そこで息子たちは父を憎み、殺して食べてしまった。その後、父を殺したことを悔い改めた息子たちは、このような行為を再び繰り返さないようにするために規約をつくった。すなわち、殺害した父を神として崇めて、父を象徴するトーテム獣を殺すことを禁じたことと、同族の女たちをめぐる争うことのないように近親相姦を禁じたことである。それは「一種の社会契約」であって、それが「道徳と法のはじめ」であったという。原罪といわれる罪の意識や宗教や倫理の起源も、この「原父殺害」にあるという。

そのようにして、恐れられ、憎まれ、尊敬され、うらやまれていた父が、神として崇められるようになったのであり、宗教とは「父コンプレックス」の土台の上に成立したものであった。このようなフロイトの解釈によれば、道徳や倫理は絶対的な父権を中心とした権威体制の反映であり、一種の強迫観念的な掟であった。結局、フロイトにおいて、神とは架空の存在であり、規範とは、親子、兄弟同士が争わないようにするための契約であり、取り決めであった。

(4) フロイト左派

マルクス主義者は、人間(労働者)は経済的に抑圧されることによって、本来の人間の姿を失っていると見たが、フロイト左派は、人間は性的に抑圧されることによって、本来の姿を失っていると見た。したがって、性を抑圧する規範は余計なものであり、排除すべきであった。そのような立場から、ライヒは「性器性欲にかけられている禁止を解く」ことによって神経症は治ると主張した。そしてマルクーゼは、ブルジョア・イデオロギーからエロスを解放し、エロスの文明を実現することを説いたのである。結局、フロイト左派によれば、規範は「有害なもの、廃棄すべきもの」であった。それは正に倫理・道徳の破壊の理論であった。

(5) 伝統的な宗教の規範

伝統的な宗教において、規範とは神から人間に与えられた絶対的な命令であり、戒めであった。

ユダヤ教とキリスト教に共通のものである旧約聖書に書かれているように、神は人間始祖のアダムとエバにたいして、「善悪を知る木の実」を絶対に食べてはならないという戒めを与えられた。それは神が祝福するまでは勝手に性愛を結んではならないということ、すなわち結婚するまでは純潔を守れということであった。

モーセは神から次のような十戒をさずかった。「あなたは私のほかに何ものをも神としてはならない。あなたはどんな偶像も拝んではならない。みだりにわたしの名を唱えてはならない。安息日を覚えて、これを聖とせよ。あなたの父と母を敬え。あなたは人を殺して

はならない。あなたは姦淫してはならない。あなたは盗んではならない。あなたは偽りの証言をしてはならない。あなたは隣人の家をむさぼってはならない」(出エジプト記20章)。

イエスはそれを継承して「殺すな、姦淫するな、盗むな、偽証を立てるな、父と母を敬え」(マタイ 19:18)と語られた。

コーランにおいても「盗みをしません。姦通をしません。子女を殺しません。勝手にねつ造した嘘を言いません。正しいことで、あなたに背きません」(「試される女の章」12節)と、同様なことが語られている。

他の宗教においても、表現こそ異なれ、説かれている規範はほとんど同じであって、それらは正に唯一なる神から来たものであった。そして伝統的な宗教は、みな共通に、姦淫は人間の最大の罪であると説いていたのであった。

ところが今日、伝統的な宗教の教えは現代人にとって説得力を失っている。科学的な思考をもっている現代の人々は理性的に納得しなければ真剣に受け入れようとしなからである。現代の代表的なキリスト教国家であるアメリカにおいてフリーセックス、同性愛が蔓延し、離婚は日常茶飯事になっている現状が何よりもその事実をよく物語っているのである。一方、イスラム教の原理主義などは、戒律を恐怖手段でもって守らせようとしている。しかしそれは、かえって人間性をひどく蹂躪する結果になるのである。

(6) 哲学者の規範観

哲学においても、人間の守るべき規範を追求してきた。たとえば、西洋の近世を代表する哲学者カントは、『実践理性批判』において、「ますます新たな、かつますます強い感嘆と崇拜の念をもって、心をみたすものが二つある。それは、わが上なる星空と、わが内なる道徳法則である」と述べた。そして彼は「義務の法則は、ひとりで心にきて、いやでも尊敬させずにはおかない」と述べた。カントは内なる道徳法則すなわち規範が我々を導いていると確信していたのである。カントのいう規範はアプリアリな絶対命令としての定言命令であり、無条件的にわれわれを導いているものであった。しかし彼は、そのような規範が、どこから来るのか、いかにして生じたのか、明確にすることはできなかった。

一方、中国の儒教思想において、道徳は天道であった。天とは人格神ではなくて、自然に調和をもたらす原理であり、自然をつかさどるものであった。したがって道徳とは、神からの命令ではなく、宇宙、自然を貫いている法則であった。そして「王に徳があれば天下は平和になる」というように、徳を身につけた君主によって善なる政治が行われると考えられた。しかし、そこには現実社会における、不正、暴力、独裁などの悪の問題に対する追求はなかった。そのため儒教の道徳は君主を中心とした支配体制を維持するための封建的道徳であるという批判が生じたのである。

カントに代表される西洋哲学において、道徳や倫理の根拠が明確にされなかった。東洋の中国思想においても、天とは何であり、天道がなぜ道徳になるのか明らかにされなかつ

た。したがって哲学の説く道徳にも確固たる基盤がなかった。このような状況のもとで、ニーチェは「道徳を基礎づける」という思い上がった主張などするものでないと言い切ったのであった。⁽¹²⁾かくして、哲学の説く道徳や倫理も今日の人々に対して説得力を失ってしまったのである。

(7) コモン・センスとしての規範

道徳や倫理というものは、歴史という長い時間を経過する中で、人々の常識・良識(コモン・センス)として自然に生じたものであるという考え方がある。『国民の道徳』の中で西部邁^{すずみ}は「道徳の基礎は歴史・慣習・伝統にあり」といっている。すなわち、道徳とは、「歴史の中に自生してくるルール」であって、「歴史は道徳のドラマである」という。⁽¹³⁾

しかし慣習、伝統というものは時代とともに変わりうるものである。また古い慣習を打破しようとする現代の青年にはアピールしがたい主張であろう。さらにコモン・センスとしての規範は民族主義的な色彩を強く帯びている場合が多い。しかし今日、求められているのは民族的な規範ではなくて、全人類が共通に認めることのできる確固たる規範としての道徳であり、倫理なのである。

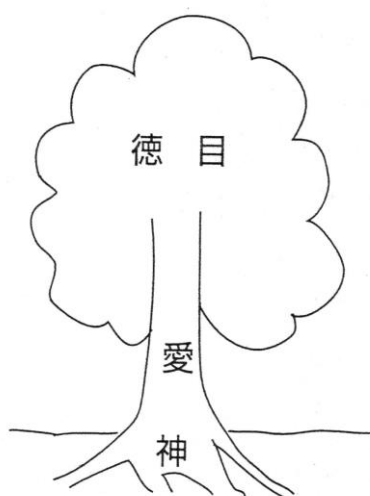
4 統一思想から見た規範

今日、倫理・道徳を破壊する無神論、唯物論の嵐の中で伝統的な宗教や哲学の説く徳目は説得力を失い、その脆弱性を露呈している。ここに無神論、唯物論を克服しながら、伝統的な宗教や哲学の教えを現代人にも納得できるように説明することのできる科学的、論理的な宗教理念が必要となる。次にそのような立場から、統一思想に基づいて規範の根拠を提示しようとするのである。なかでも結婚するまでは純潔を守り、結婚してからは不倫をしないという徳目がその基本となるのである。

(1) 規範の根拠

規範は徳目であり、価値観であるが、道徳や倫理は規範のそれぞれの表現形態である。統一思想において、道徳とは個人としての人格完成のための徳目であり、倫理とは家庭を基盤とした人間関係における徳目である。ところで徳目の基盤となっているのが愛であり、愛の基盤となっているのが絶対者なる神である(図1)。

図1 徳目の基盤としての愛と神



「愛は人の徳を高める」(コリント I 8:1)、「愛は律法を完成する」(ローマ 13:10)というパウロの言葉、「仁は徳の光なり」という韓非子の言葉のように、規範は愛を基盤としている。その愛は、キリスト教の愛、イスラム教の慈愛、儒教の仁、仏教の慈悲、ヒンドゥー教のバクティ等、様々に表現されているが、実は同じ真の愛のそれぞれの表現なのである。

さらに「愛は神から出たものである…神は愛である」(ヨハネ I 4:7~8)というヨハネの言葉、「天は仁なり」という董仲舒の言葉にあるように、愛の基盤となっているのが絶対者なる神である。絶対者はキリスト教では神、イスラム教ではアッラー、儒教では天、仏教では真如(またはダルマ)、ヒンドゥー教ではブラフマン、ユダヤ教ではエホバ等、様々の名前で呼ばれているが、それらは実は唯一なる真の神のそれぞれの表現にすぎないのである。

このように見るとき、孔子が「天徳を我に生ぜり」と言ったように、またダビデが「あなたのおきてはわたしの心のうちにあります」(詩篇 40:8)と言ったように、規範は絶対者である神から来たものである。したがって規範が成立するためには、まず神の存在が明確に示されなくてはならない。

科学時代の今日、人々はただ信ぜよと言われても、信じられないのが本性である。そこで科学的、論理的に神の存在を説明することが必要となる。また創造主なる神が存在するとすれば、生物は弱肉強食の生存競争のなかで、自然選択によって進化したのではなくて、神によって創造されたということになる。したがって創造論を、人々が受け入れられるように科学的に説明することも必要となる。しかし、神の存在と創造に関しては別の機会に論ずることにして、ここでは神が実在するという立場から論を進めることにする。

上述したように、伝統的な宗教の説く規範は共通に愛を基盤とするものであった。すなわち規範は「規範のための規範」ではなく、「愛のための規範」であった。それでは、哲学者の説く規範の場合はどうであろうか。自然のままの人間を追求したルソーは、人間の心に

ある、自然的なものである「憐れみ」の感情が道德の基盤であると考えた。しかし「人はただ、自分自身もまぬがれられないと思う他人の不幸だけを憐れむ」⁽¹⁴⁾というように、ルソーのいう憐れみは自己愛にとらわれたものであった。

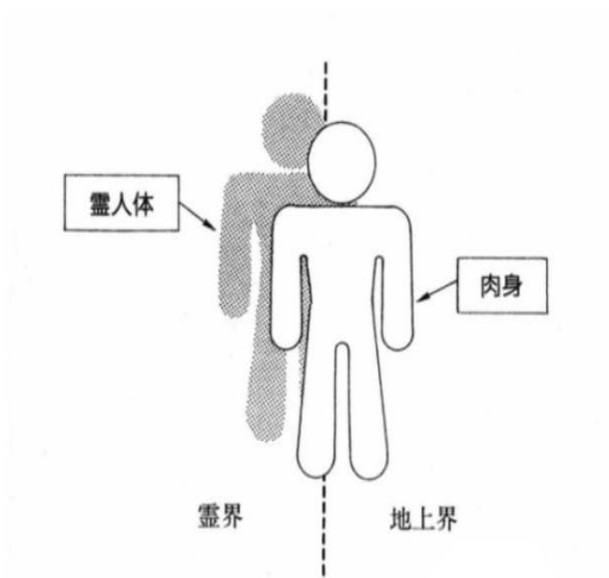
カントは当初、ルソーに共鳴し、道德性とは人間の本性の自然的な発露であると考えていた。しかしルソーの憐れみは純粋さと普遍性に欠けていた。そこでカントは、普遍的で純粋な道德を確立しようとして、理性を基盤とした、アприオリな義務としての道德を提示したのであった。しかし、カントの提示した道德は純粋であるが形式だけを重んじるものであって、われわれの心を動かさないものとなったのである。ルソーのいう憐れみが利己的なものでない、純粋で普遍的な愛であったら、カントもそれを受け入れていたことであろう。

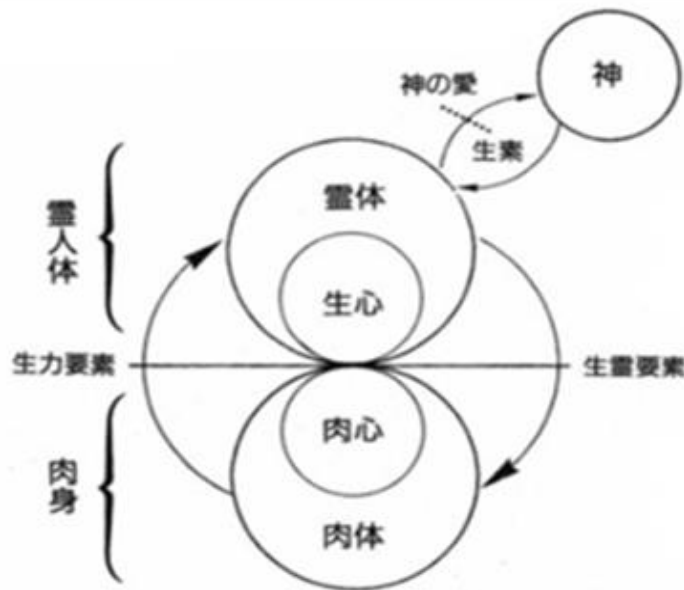
統一思想において、規範の基盤は愛であるというとき、その愛は普遍的で、純粋な、真の愛をいうのである。愛には真の愛ではない利己的な愛もあるが、それに関しては「真の愛と偽りの愛」として後で説明することにする。

(2) 本性的人間と規範

人間は霊と肉、すなわち霊人体と肉身の二重的存在である（図2参照）。

図2 霊人体と肉身からなる人間





霊人体の心が生心であり、生心は愛(真の愛)と真善美の価値を追求しようとする。それに対して肉身の心は肉心であって、性と衣食住を追求しようとする。ここに本来の人間のあるべき姿において、生心と肉心の関係は主体と対象の関係にある。それは肉身が霊人体の成熟のためにあることを意味する。したがって、肉心が求める性はそれ自体のためにあるのではなく、生心の追求する真の愛のためにあるのである。

動物には霊がないために、動物は性の衝動に従って、本能的に生きている。したがって人間において、愛が成長し、成熟しないうちに、性行為をすること、あるいは愛なくして性行為をすることは、動物的に生きるということになる。

愛は人と人を結びつける強い力である。力は正しい方向に作用すれば調和と創造をもたらすが、方向性を誤ると破壊作用にもなる。たとえば万有引力によって、宇宙は運行し、自然界の秩序と美が実現されているが、万有引力のために、衝突や墜落の惨事をもたらすこともある。水も、水路や水道を通して来れば、炊事や風呂などの水として我々の生活になくてはならないものであるが、水路を破壊して、氾濫すれば、洪水となって大きな被害をもたらす。電気も、電線を通して来れば、様々の電気製品を動かすことができ、われわれの生活になくてはならないものであるが、漏電したり、放電したりすれば危険なものとなる。同様に、愛も秩序的に、規範に従って育くまれば、美しく、調和したものになるが、衝動的な無軌道な愛は悲劇を招くのである。

人間は幼年期から少年、少女期を経て、思春期を通過しながら肉体的に成長していく。それと同時に愛も成熟していく。そうして愛が十分に成熟したところで、一人の男性と一人の女性が結婚するようになる。そのとき、性は愛を中心として営まれるようになるのである。

生心が主体、肉心が対象となっている人間は心と体が一つになった人間であり、統一思

想では「性相と形状の統一体」という。そして生心と肉心は愛を中心として授受作用をなしているために、人間は「愛的人間」(homo amans)または「心情的存在」である。心情とは「愛を通じて喜びを得ようとする衝動」である。したがって、人間を根底から動かしているのは、「愛したい、愛されたいという抑えがたい衝動」なのである。

心と体、または生心と肉心が一つになるための究極的な要因は真の愛である。真に子供を愛している親は、自分の肉心の欲求を満たすよりは、まず子供によく食べさせ、よく着せ、よく住ませたいと願うであろう。また子供が危機に瀕するときには、わが身を顧みずに、火の中、水の中に飛び込んで救おうとするであろう。従って、真の愛を中心として生きるようになるとき、肉心は生心に自然に従うようになり、肉心は生心に共鳴するようになるのである。

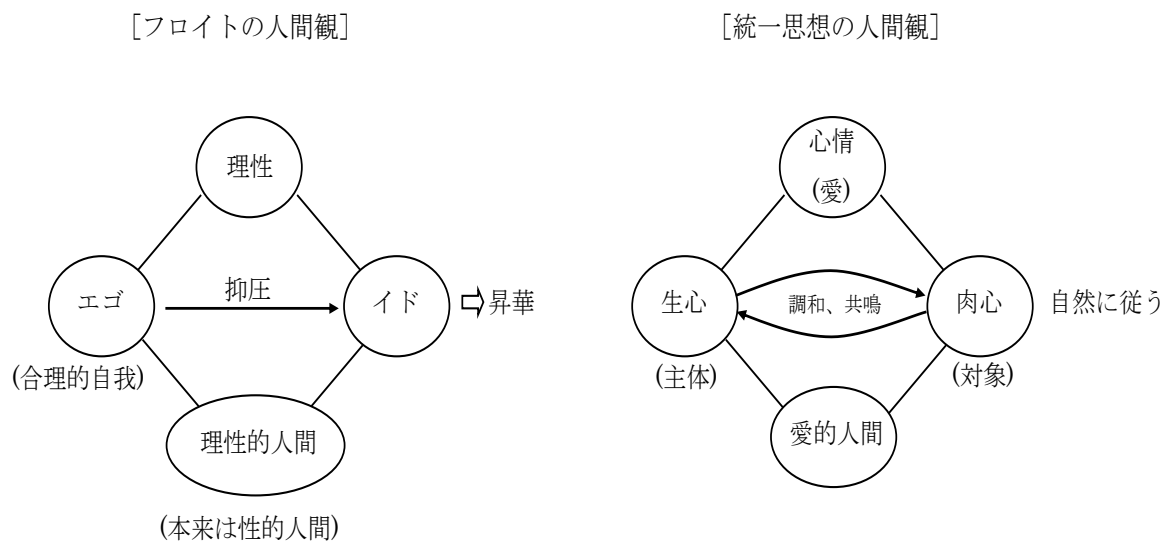
マルクス主義は「人間はなによりもまず飲み、食い、住み、着なければならない」、「猿が労働して人間となった」、「生産力の発展によって階級が生じ、闘争が生じた」と見ている。すなわちマルクス主義の人間観は「衣食住を求めて労働し、闘争する猿」である。

ダーウィニズムは、人間は衣食住と性を追求してやまない、「生存の本能に駆られた動物」であり、動物世界の中であらゆる生存競争に勝ち抜いた「最も生存に適した猿」である。

フロイト主義は人間を「性的な本能に操られた動物」と見ている。フロイトによれば、愛とは「性的結合を目標にしたところの性愛」のことであった。そこには本来の愛というものは全く見られない。そして実際、フロイト主義者たちによる『精神分析用語辞典』を見ても、そこには「愛」という言葉は見当たらず、あるのは「性器愛」という表現だけなのである⁽¹⁵⁾。結局、フロイトの思想は人間の霊性を否定し、愛を性欲に還元するものであり、愛を窒息させようとするものであった。フロイトの人間観は正に「性的人間」であり「性的動物」であった。

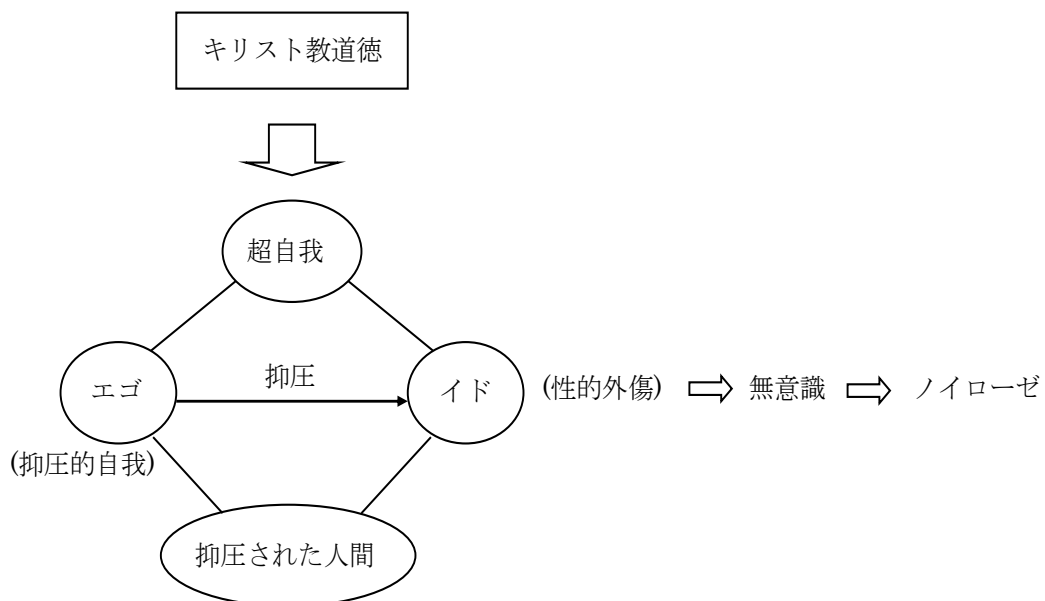
フロイトのいうイドとエゴは統一思想から見れば、生心と肉心に相当するものといえよう。しかし、統一思想において生心は霊人体に宿る心であるのにたいして、人間の霊性を認めないフロイトにとって、エゴは根拠のないものである。さらにフロイトはエゴによってイドを抑圧せよと主張したが、統一思想から見れば、愛を中心として肉心は生心に共鳴し、自然に従うようになるのである。フロイトのエゴとイドからなる人間観、統一思想の生心と肉心からなる人間観を図で表すと図3のようになる。

図3 フロイトと統一思想の人間観



なおフロイトの見た、キリスト教封建道徳の下での抑圧された人間像は図4のようになる。

図4 フロイトの見た、キリスト教封建道徳下における性的に抑圧された人間



フロイトの人間観の原点は「性的人間」であったが、やがてエゴによるイドの抑圧を主張し、「理性的人間」の装いをした。しかし第一次世界大戦における破壊活動と、その後の狂信的なナチズムの台頭によって、彼は人間の理性の脆弱性を目撃し、「理性的な人間」にも不信を抱くようになり、ペシミズムに陥ったのであった。

マルクス主義、ダーウィニズム、フロイト主義の人間観は、人間を動物的存在と見なすものであった。現実の人間には確かに、そのような動物的な姿があることは否定できない。しかし、それは人間の本来の姿ではない。そのような人間観は、人間のゆがんだ、墮落した姿を強調したものにすぎないのである。人間はそのような墮落した状態から脱して、本来の状態を実現しようと生きているのである。

人間の本来の姿は、マルクス主義のいうような、「衣食住を求めて労働する猿」ではなく、ダーウィニズムのいうように「生存の本能に駆られた猿」でもない。人間は肉身生活を通じながら、愛と真善美の価値の生活を目指して生きる心身の統一した人格的存在である。またフロイトのいうような性的な本能に操られた「性的人間」ではなく、真なる愛をもって、「愛したい、愛されたい」と願う「愛的人間」であり、「心情的存在」なのである。そのような人間の本来の姿は必ず実現されなくてはならないし、また実現されるのである。そして、そのためには愛の道すじとしての規範が必要なのである。

(3) 規範の意義

マルクス主義において、規範とは、家長が家を支配するためのものであり、領主が農民を支配するためのものであり、君主が国民を支配するためのものであった。すなわち規範とは「支配のための規範」であった。

ダーウィニズムにおいて、人間社会の規範は進化によって生じたものであって、生存競争に有利になるための「生存のための規範」であるが、進化論の立場から規範の成立を説明することはできなかった。

フロイト主義において、規範とは同族同士が争わないようにするための一種の掟であり、取り決めであった。つまり規範とは「争わないようにするための規範」であった。

フロイト左派においては、規範は「有害なもの」であった。すなわち規範とは、収容所の有刺鉄線のようなものであって、そんなものは切り捨てろというのである。

現代の無軌道な青少年たちの思考方法は、人に迷惑をかけなければいいじゃないか、というものである。すなわち規範は「無用なもの」である。しかし、そのようにして規範を無視し、無軌道な生活に走った結果、非行、暴力、麻薬など様々の社会問題が生じるのであり、彼らは結婚しても幸福な家庭を築くのは困難である。

既成の宗教において、規範とは、神から人間に与えられた戒めであり、神が人間を審判される「戒律としての規範」であった。すなわち人間が規範を守れば神の祝福を受け、規範を破れば罰を受けるというものであった。しかしそれは、しばしば律法主義に陥る場合

が多かった。哲学者たちが提示した規範にも、有識者たちの提示した規範にも、確固たるものはなかった。

次に統一思想の立場から規範の意義について述べる。

① 自由と規範

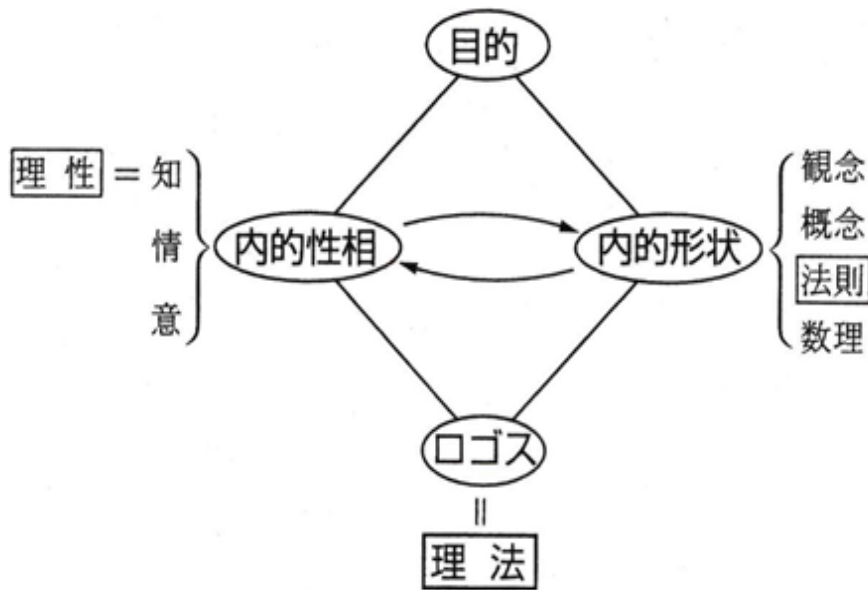
統一思想から見るとき、規範とは愛が真に愛らしく現れるための愛の標識、道しるべであり、愛の道すじである。すなわち規範は真なる愛の実現のためにあるのであり、「愛のための規範」である。

人間の心は生心と肉心からなりたっているが、生心と肉心は主体と対象の関係になくはならない。しかし幼い時には生心の成長が十分でないために、そこには道しるべ、または標識としての規範が必要となるのである。それは幼い子供は泳げないために、彼らが川や池に近づかないようにするために、標識が立てられたり、親が見張ったり、柵をつくったりするのと同様である。すなわち、愛が十分に成熟していないとき、性の衝動は危険なものであるから、その衝動を刺激し、発動させるような方向に行ってはいけないという道しるべなのである。

しかし子供が成長して、よく泳げるようになれば柵や標識はその役目を終えるようになる。また親が見張る必要もなくなる。それと同じように、愛が成熟したとき、規範の使命は終わる。けれども、その時、規範は無効になるのではない。義務とか強制的なものとしてではなく、人は心の欲するままに行動しながら、自然に、規範に従うようになるのである。

統一思想から見るとき、人間は「ロゴスの存在」または「規範的存在」である。ロゴスとは、神の性相(心)の中において、創造目的を中心として、内的性相(内性)と内的形状(内形)が授受作用をなすことによって形成される構想であり、設計図である(図5)。

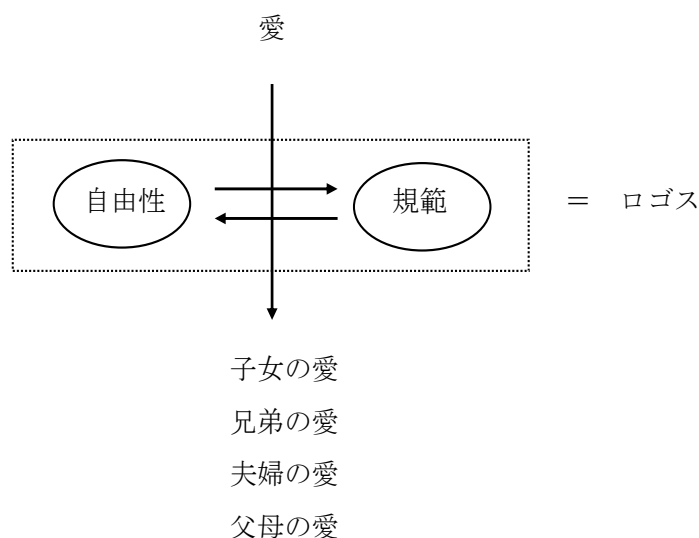
図5 神の構想としてのロゴス



内的性相は知情意の機能をいい、内的形状は観念、概念、法則、数理など、心の中の映像(イメージ)をいう。ここで内的性相における知の機能の理性と、内的形状における法則が重要な働きをしているので、理性と法則の側面を強調して、ロゴスを「理法」ともいう。理性は自由な判断、自由な思考であって、その特徴は自由性である。また法則の特徴は必然性であるが、法則は自然界においては自然法則として、家庭や社会においては規範として作用する。

愛が真に愛らしく現れるためには、ロゴスを通じなくてはならない。愛がロゴスを通じるということは、自由の中で規範に従うということである(図6)。

図6 ロゴスを通じた愛の実現



恐怖手段でもって強制的に規範を守らせるということは、人間性の蹂躪であり、そこでは愛は萎縮して、正常に育つことはできない。たえず監視しながら規範を強制していくとすれば、人間はロボットの存在、または鎖でつながれた動物のような存在となることであろう。真の愛は自由意志で自律的に規範を守ることによって、成長し、成熟してゆくのである。

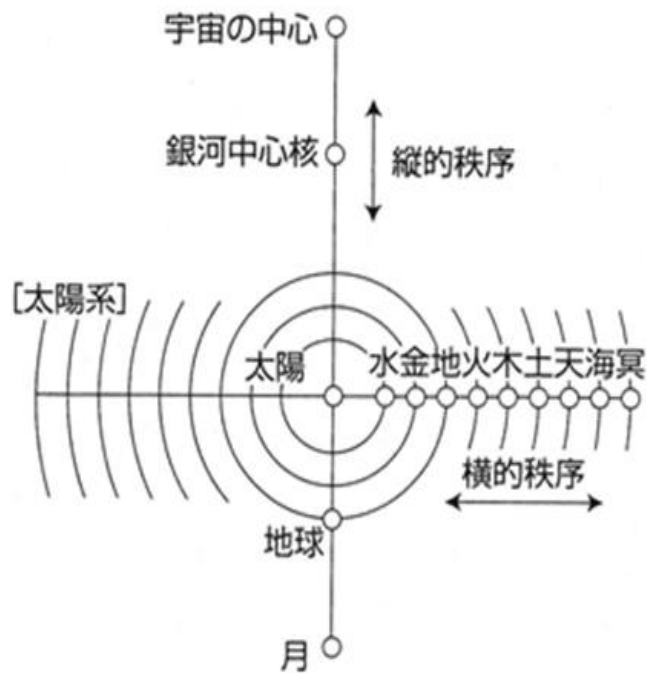
フロイトはエゴによってイドを抑圧せよというが、イドを抑圧してもイドは相変わらず荒れ狂ったままであり、人間は本性において動物的な存在に変わらない。しかし統一思想においては、愛を中心として肉心は生心に共鳴するようになるのであり、人間の本性は人格的存在、愛的存在なのである。

② 宇宙の法則に裏づけられた規範

人間の守るべき規範は便宜的、相対的なものでなく、絶対的なものである。それは宇宙法則と規範との対応から論ずることができる。

宇宙の秩序には縦的な秩序と横的な秩序がある。宇宙の縦的秩序とは、衛星(月)→惑星(地球)→恒星(太陽)→銀河系の中心→宇宙の中心からなる中心の系列をいい、宇宙の横的秩序とは、太陽を中心とした水星→金星→地球→火星→木星→土星→天王星→冥王星という惑星間の系列をいう(図7)。

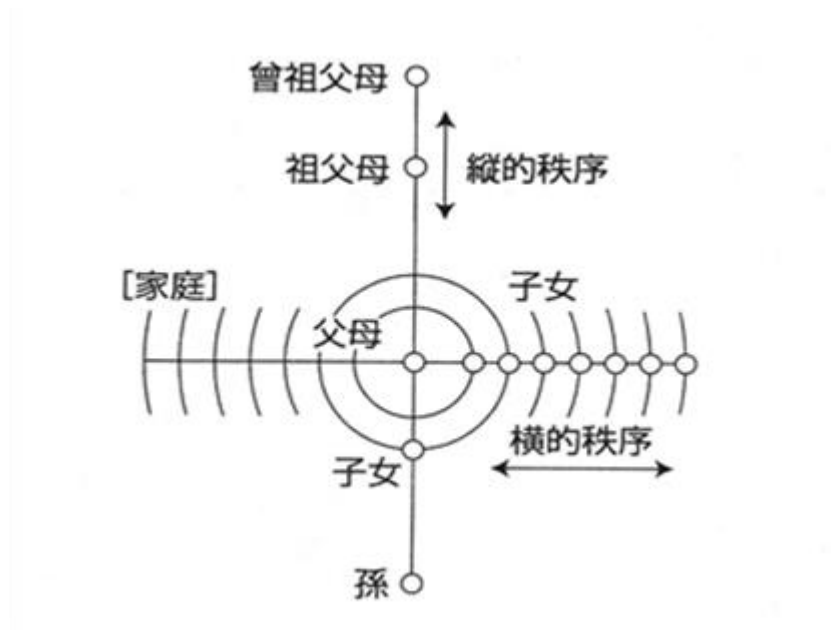
図7 宇宙の縦的な秩序と横的な秩序



そして、そのような縦的、横的な秩序の中であって、天体はそれぞれ個別性をもつ個性真理体として存在しているのである。

ところで人間は小宇宙であり、宇宙の縮小体である。秩序という点から見れば、家庭は宇宙の縮小体であり、宇宙は家庭の拡大型である。したがって家庭にも縦的秩序と横的秩序がある。孫→子供→父母→祖父母の序列が縦的秩序であり、父母を中心とした兄弟姉妹の序列が横的秩序である(図8)。

図8 家庭の縦的な秩序と横的な秩序



なお夫と妻の関係も、もう一つの横的秩序である。そのような縦的、横的秩序の中にあつて、人間一人一人は、特有の個性を持った人格的な個性体として存在しているのである。

このような家庭、社会における縦的秩序、横的秩序、個別性(人格性)に対応するものとして、縦的規範、横的規範、個人的規範がある。

縦的規範とは、父母と子女、先生と生徒、主人(リーダー)と部下等の間で守るべき規範であり、横的規範とは、兄弟姉妹間、隣人間、夫婦間において守るべき規範であり、個人的規範とは、生心と肉心が愛を中心として円満な授受作用を行う人格者となるための規範である。そしてこれらの規範は子女の愛、兄弟姉妹の愛、夫婦の愛、父母の愛を実現するためのものであり、愛の人格を形成するためのものなのである。

縦的規範には、父母の子女に対する慈しみ、子女の父母に対する孝行、先生の生徒に対する指導、生徒の先生に対する尊敬、主人(リーダー)の部下に対する主管(善政)、部下の主人に対する忠誠などがあるが、これらは父母の愛と子女の愛、師弟間の愛、リーダーと部下の愛が築かれるために必要な徳目である。

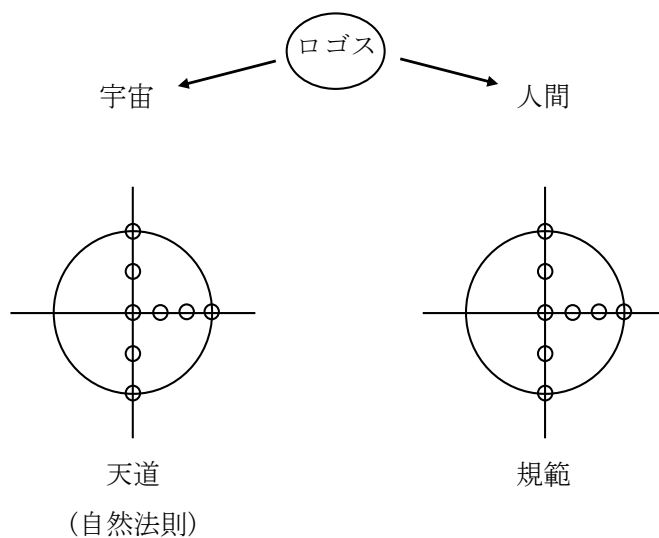
横的規範とは、兄弟姉妹の間、友人の間、さらには団体と団体、国と国の関係に適用される徳目であつて、義理、信義、協助、奉仕、和解、寛容などがある。これらは兄弟姉妹、友人同士、団体と団体、国と国が兄弟姉妹の愛で結ばれるために必要な徳目である。さらに夫婦間の徳目も横的な規範であるが、それは和、信頼、貞節(不倫をしないこと)などである。これらは真なる夫婦の愛が築かれるために必要な徳目であつて、これを破れば夫婦の愛は壊れていかざるをえない。なかでも不倫をしないということが、最も重要である。

個人的規範としては、正直、正義、勇氣、知恵、節制、勤勉、自立、自助、純潔などがあるが、これらは愛の人格を形成していくために必要な徳目である。なかでも結婚するま

では純潔を守ることが最も重要な徳目である。

宇宙の秩序体系は宇宙の法則(天道ともいう)によって支えられており、家庭や社会の秩序体系は規範によって支えられている。そして宇宙の法則も人間の規範も神のみ言(ロゴス)からきたものである。従って規範は便宜的につくられたようなものではなく、封建時代の遺物でもなく、余計なものでもない。天地創造以来、宇宙を導いている自然法則すなわち天道が絶対的であるように、人間の守るべき規範も絶対的なものである(図9)。

図9 天道(自然法則)と規範の根源としてのロゴス



伝統的な宗教の説いた神の命令としての道徳は、神のみ言(ロゴス)が人間に規範として与えられたものである。カントのいう定言命令としての道徳も、神の存在を括弧に入れて、要請される存在としただけであって、本質的には神の命令と同じであった。すなわち、現代のフランスの哲学者、フランソワ・ジュリアン(Francois Jullien)がいうように、「カントは定言命法の形式で、伝統的に神の命令であったもの——古代モーゼの戒律(十戒)——を世俗化しただけ⁽¹⁶⁾」なのである。

一方、中国の儒教思想の説く道徳は天道であり、宇宙を貫いている法則であるとされたが、統一思想から見れば、それも神のみ言(ロゴス)が宇宙に作用したものである。西洋の説く規範と東洋の説く天道の関係が今までは明らかでなかった。しかし図9に示すように、両者ともに神のロゴスから来たものであって、両者には明確な対応関係があるのである。カントの心を崇敬の念で満たした「わが上なる星空」と「わが内なる道徳法則」は両者ともに神のロゴスによって導かれていたのである。

なお中国の儒教においても、人間の心の中にある規範を直接探ろうとする王陽明(1472—

1529)の思想があった。儒教の本流である朱子(1130－1200)は「格物致知」の立場から、物(自然)の本質を知り、正しい知識を得ることによって、正しい心を持ち、人格の完成を目指すことを主張した。それに対して、王陽明は自らのうちにある心の理(規範)を探り、それに従って実践することを主張し、「知行合一」を唱えたのである。この両者の対立も、神のロゴスが宇宙の天道となり、また人間の心の規範となると見る統一思想の見解によって、解消されるのである。

③ 歴史を貫いている規範

先にコモン・センスとしての道徳や倫理というものは時代とともに変わりうるのだから説得力に欠けると述べた。しかしながら統一思想は、歴史の中に規範が生き続けてきたことを認める。ただそのためには、歴史がどこから始まって、どこに行くのかまったくわからない偶然的な歩みの歴史ではなくて、歴史とは、失われた本来の理想世界を実現しようとする復帰歴史であることを明らかにしなくてはならない。道徳や倫理は理想世界の実現のための規範であるからである。

宗教の創造の物語や各民族の神話を見れば、歴史の始めに、理想とする世界があり、人々はそれを目指していたことが書かれている。しかし人間始祖の墮落によって、その理想が失われて非原理的な悪の支配する世界になってしまった。しかし歴史を通じて、善悪の闘争が繰り返りひろげられながら、次第に悪を退けて、善を実現しようとしてきたのが人類歴史であった。そのように見ると、歴史を貫いて道徳や倫理が作用してきたのは事実なのである。

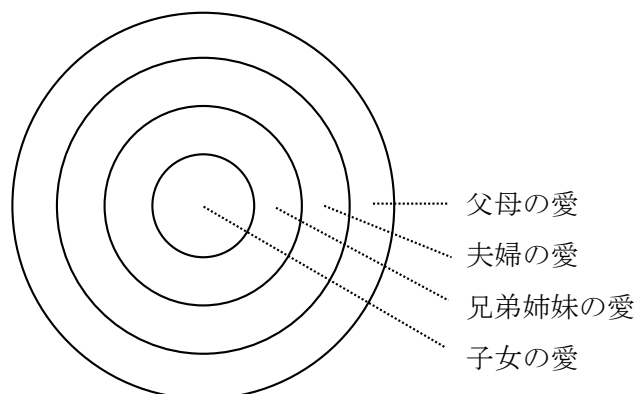
歴史学者であり神学者でもあるジェラルド・ハード(Gerald Heard)は『墮落論』(*Is God in History?*)の中で、神話の中に「人間の心の中にある青写真」としての理想があり、歴史を通じてその理想が実現されていくということを次のように述べている。

それゆえわれわれは神話というものを一つの理想の展開に努力する種族の歴史だと考えなければならない。……もっとも初期の段階にある萌芽の発芽点の目に見えない「^{オルガニザ}編成源」が、成熟した生物の理念の存在する場であるとともに、その生育した明確な形態をつくりあげるために、そこに種々の薬品の投ぜられる場でもあるように、歴史にあっては神話がこれと同じ役割をするのである。それは人間の心の中にある「青写真」ともいえるものであり、これを歴史に翻訳しなければならないという義務感を人間に課するものである⁽¹⁷⁾。

(4) 愛の成長

家庭において、愛は、①子女の愛、②兄弟姉妹の愛、③夫婦の愛、④父母の愛というように成長していく(図10参照)。

図10 家庭における四つの愛



まず父母の愛が子女に注がれることにより、子女の心に子女の愛が育まれる。次に子女は自分の兄弟姉妹に対して、自分が父母から愛されているように、同じく父母から愛されている兄であり、弟であり、姉であり、妹であることを理解し、兄弟姉妹を愛するようになる。そのようにして兄弟姉妹が互いに愛し合うようになるのである。

次に兄弟姉妹の愛を基盤として、一人の男性と一人の女性が、神と両親の祝福を受けて、夫婦となり、愛し合うようになる。そこに夫婦の愛が成立する。そして夫婦の愛のもとで子女が生まれると、そこに父母の愛が成立するようになる。そのように、家庭を基盤として、子女の愛→兄弟姉妹の愛→夫婦の愛→父母の愛の順序で、愛は成長し、成熟していくのである。すなわち、子女の愛が兄弟姉妹の愛の基盤となり、兄弟姉妹の愛が夫婦の愛の基盤となり、夫婦の愛が父母の愛の基盤となっているのである。ここで子女の愛と兄弟姉妹の愛が成長していないまま、異性の愛が結ばれるとすれば、それは動物的な本能的なものになってしまう。実際、動物には愛の成長はなく、ただ本能に従うだけである。

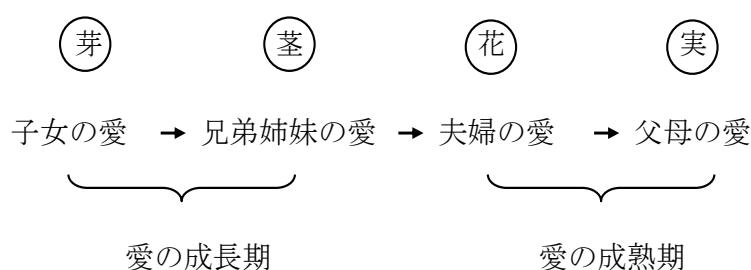
特に、兄弟姉妹の愛が成熟していることが、真なる夫婦の愛が成立するための必要条件となる。兄弟姉妹の愛が家庭から学校に、社会に拡大されていくとき、それは友愛（友情）となるが、そのような友愛が、真なる夫婦の愛を成立させる基盤となるのである。実際、兄弟姉妹の愛を基盤として夫婦となったとき、夫から見れば、自分と同世代の女性は姉であり、妹であるとするであろうし、妻から見れば、自分と同世代の男性は兄であり、弟であるとするようになる。そこには不倫は生じえない。しかし、異性を兄弟として、あるいは姉妹として見るができないときには、誤った男女の関係が生じやすいのである。

アリストテレスは『ニコマコス倫理学』のなかで、友愛フィリアは高貴な愛であり、夫婦愛の基礎は友愛にあると説いている⁽¹⁸⁾。イギリスの英文学者であり、神学者でもあるクライブ・S・ルイスも次のように述べている。「古代ギリシア・ローマ人にとっては、友情

はすべての愛のなかで最も幸福な最も完全に人間的なものに思われた。すなわち、それは人生の栄冠であり、徳の修練所であった」⁽¹⁹⁾。そして彼は、今日、この友情が無視されているところに現代社会の大きな問題があるというのである。

子女の愛→兄弟姉妹の愛→夫婦の愛→父母の愛という愛の成長過程は、植物の芽→茎→花→実の成長過程にたとえることができよう。ここに子女の愛と兄弟姉妹の愛は、愛の成長期に相当し、夫婦の愛と父母の愛は、愛の成熟期に相当すると見ることができる(図11)。

図11 愛の成長



植物において、成長期に時期はずれに花を咲かせたら、よい実はみのらないであろう。サケは川を上る時、雄同士、雌同士が集まって登ってゆき、上流にたどりついて環境が整ったとき、ペアになって産卵する。サケが川を上る途中でペアになって産卵したら、卵は急流で流れたり、生まれた稚魚も育たないであろう。成長期を無事に通過して、基盤が整ってから、よき実りを得ることができるのである。それと同様に、子女の愛と兄弟姉妹の愛が十分に成長し、成熟した基盤のもとで、真なる夫婦の愛が結ばれて、良き子女が繁殖できるのである。

(5) 誰もが願う真の愛

人間は誰も男女の愛においても、真の愛を求めている。しかし願わざる愛の力に引きづられてしまい、真なる愛を実現できないでいるというのが現実である。誰も真の愛を求めていることは次のような事実から見て明らかである。

① 永遠なる愛を誓って結婚する

神の前であろうが、なかろうが、男女は必ず「末永く」、「とわに」、「死が二人を分つまでは」などといって、永遠なる愛を誓いながら結婚するのである。期間を区切って「しばらくの間、愛します」といって結婚するカップルがいるとすれば、それは異常なカップルである

う。

②愛が分けられることを願わない

結婚するとき、「私だけを愛しますか」、「あなただけを愛します」といって愛は成立するのであり、「実は、あなた以外にも何人か愛する人がいますが、平等に愛することを誓います」といえば、真なる愛は成立できないのである。

③複数の父母を願う子女はいない

子供は、父母が離婚しては再婚し、その結果、複数の父ができたり、複数の母ができることを願わない。永遠に一人の父、一人の母を願うのである。そのように子女の立場から見ても、父母が真の愛で永遠に愛し合うことを願っているのである。

(6) 墮落によって生じた偽りの愛

そのように誰しも真なる愛を求めながら、願わざる偽りの愛にひきづられているということは、男女の愛の中に真の愛と偽りの愛が共存しているということである。すなわち男女の愛は、一面においては純粹で甘味なものであるが、もう一面においては自己中心的であり、冷酷さを秘めている。それは古今東西の恋愛をテーマにした思想や文芸作品によく表されている。

デンマークの生んだ哲学者キルケゴール (S. Kierkegaard, 1813-55) は、自らの体験を通じて男女の愛の問題に立ち向かった。二十四歳になった時、彼は社交界で出会った十四歳の美しい少女レギーネ (Regine Olsen, 1822-1904) に夢中になり、彼女に接近し、三年後には婚約にまでこぎつけた。ところがその直後、自分の愛は誘惑者の愛であったことに気づき、その愛でもってレギーネを真に幸福にすることはできないと悟った。そして真なる愛で結ばれるためには、誘惑の愛を清算しなくてはならないと決意して、婚約からおよそ一年後に、一方的に婚約を破棄した。キルケゴールの真意は、神の前に正しく立つことのできる人間になってから、真の愛でレギーネと再び結ばれたいということであった。しかしキルケゴールの真意はだれにも理解されず、人々から非難されるばかりだった。その後、レギーネは他の男性と結婚し、キルケゴールは真なる男女の愛を願いつつ、その理想を実現し得なかった。

キルケゴールは次のように語っている。「自然的な愛〔恋愛〕は自身の内部に毒素を持っています。(それは利己の愛の毒素であります)。それは必ず醜態をひき起こし、その醜態の中に陥ち入らざるをえません⁽²⁰⁾」。キルケゴールは、恋愛の中に潜む利己の愛の毒素を清算して、真の愛を実現すべく格闘したのであった。

今日、恋愛結婚は当たり前のこととなり、結婚の最も自然な形態と見なされているが、ロマンチックな恋愛による結婚を賛美するようになったのは、つい最近のことである。し

かしロマンチックは恋愛による結婚は不安定であり、長続きしない場合が多い。恋愛を最も賛美するアメリカにおいて、離婚が最も多いという事実がそのことを証明している。ロマンチックな恋愛は一瞬の情熱であって、やがてそれは雲散霧消していく運命にあるからである。フランスの思想家ドニ・ド・ルージュモン(Denis de Rougemont,1906-85)は次のように語っている。

〔人びとは〕情熱恋愛がいかなるものであるか、どこから来て、どこへ行くものなのかを正確に知らない……

〔そこには〕何か憂慮すべきものがあるという予感を持ちながらも、情熱恋愛に楯つくことによって、不粋者のごとくに語るのがこわいのである。こんなわけで、彼らはずいぶんうっかりした振りをして、根本問題を素通りしてしまう⁽²¹⁾。

日本で最も人気のある文学作品は夏目漱石の『こころ』である。主人公の「先生」は友人の「K」とともに、一人の「お嬢さん」を愛するという三角関係に陥った。「先生」は「お嬢さん」を専有しようとして、「K」を裏切り、その結局、「K」を自殺へと追いつめてしまった。そして「先生」は一生、罪の意識にさいなまれ、結局、自ら死の道を選ぶのであった。その中で、「先生」の口を通じて、漱石は「恋は罪悪ですよ。そうして神聖なものですよ」と語っている。漱石は恋愛の中に秘んでいる「罪の恐ろしい影」、「結核性の恐ろしいもの」を追及したのであった。

そのように今日まで多くの思想家たちが、男女の愛の背後に潜む黒い影に気づいて、それに立ち向かったのである。しかしその黒い影が一体、何であり、いかにして、それを追い払うことができるのかを、明らかにすることはできなかった。これは宗教的には、人間の墮落の問題であり、キリスト教ではエデンの園の物語として象徴的に語られている問題である。「統一原理」はこの問題を「墮落論」として解明している。その骨子は次のようである。

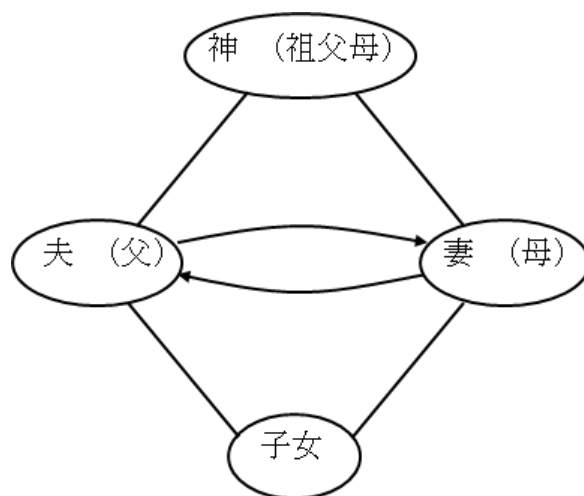
エデンの園において、アダムとエバは兄と妹のような関係であったが、彼らはやがて神の祝福を受けて幸せな家庭を築くようになっていた。アダムとエバは成長して、神が祝福するまでは、善悪を知る木の実を絶対に食べてはならないという戒めを与えられていた。それは勝手に性愛の行為をしてはならないということであった。勝手に性愛を結ぶということは、本能に従って生きる動物的な存在になってしまうからであった。

ところがアダムとエバを養育する立場にあった天使長ルーシエルがエバを誘惑し、天使長とエバが霊的に不倫の愛の関係を結んでしまった。ついでエバはアダムを誘惑し、アダムとエバは時ならぬ時に、神の祝福されない愛で結ばれてしまったのである。ここに非原理的な不倫の愛が生じることになった。「墮落論」は愛の中に潜む罪の根を根本的に解明したのである。

(7) 真の愛と偽りの愛

家庭は四つの愛を実現していく基盤となる場所である。すなわち、神を中心として夫と妻が愛し合い、子女を繁殖すると、夫婦は父母となる。そして父母と子女が愛し合い、子女同士が愛し合うようになる。そのようにして神と夫（父）、妻（母）、子女からなる家庭的四位基台が形成される（図1 2参照）。

図1 2 家庭における四位基台の形成



ここにおいて、祖父母は神の代理の位置に立つようになるのである。

本然の真なる夫婦の愛はいかなるものかといえ、全ての人々を兄弟姉妹として愛する、そのような愛の上に築かれるものである。したがって真なる夫婦の愛は、宇宙を貫くような、大きくて、広く、深い愛となるのである。それゆえ、人間に真なる夫婦の愛を求める本性がある以上、一人の男性が複数の妻をもつとか、一人の女性が複数の夫をもつというようなことは持続しえないのである。夫婦が家庭を築くということは、一つの宇宙をつくるということを意味するのであり、二つの宇宙は両立しえないからである。

不倫を行うということは、真なる夫婦の愛を破壊し、相対化することである。それは結局、四位基台を破壊すること、すなわち家庭の崩壊に通じていくのである。神の創造目的は四位基台の完成にある。したがって四位基台を完成する行為は善であり、それを破壊する行為は悪である。結局、不倫は悪なる行為とならざるをえないのである。

それでは真の愛と偽りの愛とは、いかなるものであろうか。文先生の愛に関する教えによれば、真の愛は「投入してもまた投入し、与えてもまた与える愛」、「相手のために生きようとする愛」、「最短距離を直行する愛」、「始めは小さくても次第に大きくなる愛」、「永遠、不変、絶対なる愛」、「無条件の愛」、「地球規範の愛」、「怨讐をも愛する愛」などである。それに対して、偽りの愛は「奪う愛」、「自己中心的な愛」、「屈折した、よこしまな愛」、

「始めは大きくても次第に小さくなる愛」、「衝動的な愛」、「条件付きの愛」、「塀で区切られた愛、分派をつくる愛」、「憎悪心・復讐心を抱く愛」などである。

情熱的に一瞬のうちに燃えさかる愛は、やがて情熱の炎が消えて小さくしぼんでいく。男女が互いに条件の良い相手を求めて競い合っている、今日の恋愛「市場」主義の愛は、自己中心的な奪い合いの愛である。家庭を破壊する不倫の愛は、屈折した、よこしまな愛である。これらはみな偽りの愛である。すべての男女の愛が、このような偽りの愛一色であるというのではないが、いかに美しく見える男女の愛の中にも、必ずこのような偽りの愛の要素が内在しているのである。

性についても同様に、真なる性と不倫の性がある。不倫の性とは、自己中心的な性である。それは自分の意のままに、欲望のおもむくままに、性行為を行うことであり、フリーセックスにほかならない。自分の妻以外の女性と関係する性、自分の夫以外の男性と関係する性も不倫の性である。それらはみな偽りの愛と結びついたものであり、家庭的四位基台を破壊するものである。

それにたいして真の性は相対のための性である。すなわち夫の性は妻のためであり、妻の性は夫のためである。それは夫と妻が互いに貞節を守る性であり、「絶対的な性」である。そのような絶対的な性にもとづいて真なる夫婦の愛が成立するのである。

(8) 祝福による家庭の再建

今日、家庭において、子女の愛、兄弟姉妹の愛、夫婦の愛、父母の愛が正常に育まれず、家庭が不和になったり、崩壊していく場合が多い。そしてその傾向はますます深刻化していく状況にある。それでは、この問題をいかに解決すべきであろうか。

家庭において、夫婦の愛が真なる愛になっていないところに根本的な問題があるのである。不完全な、未熟な夫婦の愛のもとで、夫婦が子女を持つようになると、その夫婦は真なる父母の愛で子女を愛することはできない。その結果、父母が子女につらくあつたり、虐待したりする。今日、離婚が多くなっているが、離婚するということは、親として父母の愛を放棄することである。そうすると、子女の心には正常に子女の愛は成長せず、かえって父母に対する恨みや憎しみが育まれる。そしてその結果、兄弟姉妹の愛も正常に成長せず、家庭や学校で、いじめとか暴力が発生してくるのである。それが青少年の非行化現象の本質である。そのような青少年が成長して、無軌道な愛で結婚すれば、結局はまた未熟な夫婦となってしまう。そして、子女を愛することのできない親となる。かくして悪循環がどんどん進行していくのである。

このような悪循環を立ち切って、真なる家庭を築き、真なる四つの愛を実現していくためには結局、夫婦の愛を立て直さなくてはならない。その夫婦の愛は真なる兄弟姉妹の愛を基盤としたものでなくてはならない。そのために、全人類が兄弟姉妹であるという基盤

のもとで、神の祝福を受けて真なる夫婦となり、真なる夫婦の愛のもとで子女を生み、真なる父母の愛で子女を育てていくというようにしなければならないのである。そのような立場からおこなわれているのが統一教会の国際結婚である。その意義について、文鮮明先生は次のように語られている。

そのような世界を收拾するために現れたのが統一教会です。それゆえに統一教会は、五色人種が集まって兄弟の愛をたてなければなりません。アダム家庭において兄弟圏が崩れてしまったので、兄弟の友愛を立てなければならず、兄弟の友愛が崩れることによってサタン世界の血統を中心とした結婚が展開されたので、これとは反対に神様を中心として、真の父母は絶対的な兄弟の基準で、絶対的な神側に属した愛を中心として、生命と血統の因縁をつづらなければなりません。そのような超民族、超人種的な祝福を行うのが、統一教会の世界祝福化なのです。それが国際結婚です⁽²²⁾。

注

- (1) フリードリッヒ・エンゲルス、村井康男他訳『家族、私有財産および国家の起源』大月書店＝国民文庫、1954年、39－40頁。
- (2) 同上、45頁。
- (3) 同上、79頁。
- (4) 同上、97頁。
- (5) 同上、105頁。
- (6) マルクス＝エンゲルス、大内兵衛・向坂逸郎訳『共産党宣言』岩波書店＝岩波文庫、1971年、65-66頁。
- (7) エーリッヒ・フロム、懸田克躬訳『愛すること』紀伊国屋書店、1959年、127頁。
- (8) 小此木啓吾『フロイトーその自我の軌跡』日本放送出版協会＝NHK ブックス、1973年、58頁。
- (9) ハーバート・マルクーゼ、南博訳『エロスの文明』紀伊国屋書店、1958年、180頁。
- (10) 同上、180頁。
これは、マルクーゼがハインリッヒ・フォン・クライス(Heinrich von Kleist)の言葉を引用したものである。
- (11) C.H. ウォディントン、内田美恵他訳『エチカル・アニマル』工作舎、1980年、149頁。
- (12) ニーチェ「道德の博物学への寄与」(『善悪の彼岸』186節)
- (13) 西部邁^{オオサキ}『国民の道德』扶桑社、2000年、396頁、397頁、427頁。
- (14) ルソー、樋口謹一訳『エミール』(中)、白水社、1986年、71頁。

- (15) ドニ・ド・ルージュモン「愛」、『愛のメタモルフォーズ』平凡社、1987年、66-67頁。
- (16) フランソワ・ジュリアン、中島隆博・志野好伸訳『道徳を基礎づける』講談社=現代新書、2002年、68頁。
- (17) ジェラルド・ハード、深瀬基寛・安田章一郎訳『墮落論』筑摩書房、1965年、217頁。
- (18) 金子晴勇『愛の秩序』創文社、1989年、27頁。
- (19) クライブ・S・ルイス、蛭沼寿雄訳『四つの愛』、新教出版社、1977年、82-83頁。
- (20) キルケゴオル、芳賀檀訳『愛について』新潮文庫、1955年、62頁。
- (21) ドニ・ド・ルージュモン、鈴木健郎他訳『愛について』(下) 平凡社、1993年、246頁。
- (22) 文鮮明「九・九節の御言」『ファミリー』1999年11月号、12-13頁。